

二十八回生の誇り

佐竹喜三雄

「キャップ」と呼ばれたことが大変懐かしく思います。

中学から高校一、二年頃まで私の愛称だったのです。私たち新制中学の最初のクラスが土佐中野球部を創設し、富田先生監督の元で二年目から始まった高知県中学野球選手権で、第一回から不滅の五連覇を果たしています。

その当時の中学野球部キャプテンが私だったので、いつの間にかキャップが私のニックネームとなり、級友達は皆キャップ、キャップと呼んでくれました。

土佐高校野球部は私達中学野球部とほぼ同じメンバーで構成され、昭和二十五年に実質土佐高校野球部の歴史が始まっています。キャプテンは前土佐高校校長も勤めた池上君に変わりました。そして高知において土佐高野球部の名声を県下に轟かせるようになり、昭和二十七年春の選抜で甲子園出場を果たすという偉業を成し遂げたことは、ラッキーというより私たちの努力の賜物だと思っています。

二年生の夏、甲子園出場をかけた優勝決定戦を、宿敵の高知商と延長十九回を高知市営球場で戦ったことは忘れることが出来ません。0—0で迎えた十九回裏ツーアウト、サードにランナーを進められた場面で、バッターの打球はピッチャー左のゴロ、捕球できることを確信したショートの私がセカンドベース側にスタートを切ったとき、捕球のため俊敏に出したピッチャー池上君のグラブに当たった球はアンラッキーにも三遊間にコロコロと方向転換し、内野安打で万事休す、痛恨のさよなら負けで甲子園の夢が消えたことは返す返すも残念で、いまだに脳裏に甦ってきます。その時十九回を中田—池上の継投で、高知商打線をかわした両投手のすばらしい投球術と気力には敬服の念を禁じえません。

二十八年夏には我々と同じ釜の飯を食べた一学年後輩の山本投手と永野捕手を擁した二十九回生のメンバーが、甲子園準優勝の球史に残る偉業を成し遂げたことは我々の誇りでもあります。

今の時代と異なり、当時の溝渕監督の野球練習はスパルタ教育でした。灼熱のグラウンドでの長時間水なしでの過酷なノックなど当たり前で、汗に出る水分もなくなり、唾液も乾燥し声も出なくなるという厳しい訓練でした。

ミネラル補給など当時知識ありません。水飲めの合図と共に井戸水を腹一杯

にがぶ飲みすると、干からびていた体からおびただしい汗が一気に噴出し、その後しばらく経ってやっとまともに掛声も出せるといった究極の鍛錬の繰り返しでした。

冬場は、監督や数学教師の山本部長が自転車で併走しながら土佐高校舎から桂浜までの休みなしでのランニング、砂浜でのきついランニングを終えると、再び土佐高までの帰りのランニングなど、よく耐えられたものと思っっています。然しこのスパルタ教育こそ我々の強さの原動力だったと思います。

ある試合の攻撃で、サード森君がショートライナーを打ち、捕球されたのを確認したのでファーストまで走らず途中でベンチに引き返しました。

ベンチの前でいきなり溝淵監督からピンタを食らった事件は、試合を見ていた父兄もおりP T A問題にまで発展しましたが、本人の反省もありそのままおかまいなしとなりました。

アウトになったから走るのを止めたのは当然と映りますが、溝淵野球は如何なる場合でも全力疾走がその基本だったのです。ここに土佐高野球の全力疾走の原点がありました。私達の初の甲子園出場で、名門土佐高の名を全国に鳴らしめた「辞書を片手に甲子園」、「全力疾走の土佐高」の有名なフレーズの始まりです。

我々がこのことの元祖なのです。

スパルタ教育で得たことは、夏の暑さでもばてない強靱な肉体と、どんな苦境に立ってもあきらめず最後まで努力を怠らない不屈の精神を培ったことです。

七十七歳の年、七月末の猛暑の中でのゴルフで七十六のスコアを出し、人も羨むエイジシュートを達成できたのもそんなお陰ではないかと思っています。

また野球というスポーツから、チームメイトがお互いに助け合い、固い結束の元でのチームプレーがいかに大切かを学び、互助精神が芽生えたことです。

これらのことが今までどれだけ私の人生で役立ち、生かされてきたか、計り知れません。

土佐高校の野球部の創設に寄与し、初の甲子園出場を果たして土佐高野球部の輝かしいページを開くことが出来た二十八回生の一員であることに、深い誇りと喜びを感じています。

(平成二十五年七月)